



A L P S CAREER

<シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第18回>

公務員

民間企業人である部分



相澤 一幸
筑西市民病院 医事係長

【あいざわ かずゆき】1960年茨城県生まれ。高校卒業後、都内アパレル企業を経て1980年、筑西市入市。勤務の傍ら、ロータリークラブ提唱によるローターアクトクラブへ入会、1988年RI255地区代表に選任。資産税課等4部署経験後、都市計画部区画整理課で組合事業内新設公園をデザイン。2005年より現職、現在に至る。

進学と就職

人生には、ふと振り返って見た時、いくつかのターニングポイントが存在する。

自分の場合、岐路だったと言えるものは、高校選択、進学か就職か、そして公務員への転職が挙げられる。

自宅に近いA高校普通科を目指していたが入試直前の試験の結果、私鉄で通うB高校普通科に変更する。最後の三者面談後、母が遠くを見つめながら「これからは手に職をつけることも考えておかないとね」「私鉄の定期

代分、お小遣いも協力してもらわないとね」その言葉が引き金になり、更に翌日、C商業高校に変更してしまうの

だ。たった一回の結果で安易にネガティブな行動をとってしまう。

その頃、父の勤務する企業が戦後何番目の負債により倒産したこともあって、就職難の時のために商業科に行っておけば…と思っていたのか、母に報告すると「そう」と安堵の表情に見えた。それはそれでよかったが、自分に自信と明確な目標が無かったために、目先の些細な出来事で人生を左右する大きな決断をしていることに気付いていなかった。

入学後、最初の面接で担任の先生が「なぜ、この高校を選択したのか？」との質問をしながら、入試の結果を知らされ、愕然とした。A高校普通科に合格していた点数だったのである。こ

れが最初の気づき「自信を持って、行動していれば…」である。結局、夏休み直前まで隔靴搔痒の感でいた。

三年生にもなると《朱に交われば、…》で学校での方向性も変わり、生徒会長兼応援団長という、全く性格の違うことを経験させていただいたお陰か、某大学への推薦も頂いていたが、その頃の自分は、将来のビジョンなど二の次であり、とにかく車が欲しい、オシャレをしたいということに尽きていた。

また同時期に世間では、《大学は出たけれど…》という流行語が生まれたことも重なって、進学する意思是徐々に薄れていった。

ある日の夏休み、学校でなにげなく就職案内誌を見てみると、当時、気に

入っていたブランドの Apparel 企業の募集記事に目が留まり、軽い気持ちで入社試験の手続きを済ませてしまう。もし落ちたら行ける大学へ行けばいいなどと、何れにせよ、既に東京で生活している自分をイメージしていた。

進学していたら、また違った自分が存在していて、何処でどうしているだろう…と、もう一方の自分を見てみたい気もするが、人生は常に選択に迫られていて一方にしか進めず、その場その場で少し先を見ながら、チャレンジ精神と悔いのない最善の決断が必要とされる。

物心が付いてからは全て自分が選択していて全て自分の責任。それぞれの人生が何処かで合流する可能性は全く無いとは言えないが、今この場所と同じ境遇で存在していることは皆無に等しいだろう。

大都会、東京

初出社前日、両親が車で送ってくれた。車の中の会話はよく覚えていないが不安と期待の中、都会の怖さと自己管理責任のことを聞かされていたと思う。荷物の整理が一段落すると「もう大丈夫だから」と強がって、両親の車を見送っていたが T 字路で停車し、ウィンカーが点滅した瞬間、急に申し訳ない気持ちが込み上げてきて、なぜ、

“お茶でもしてから帰れば”と言えなかったのか一人悔やんでいたのも束の間、下駄履きのまま走り出していった。遅かった。きつと、両親も何か物足り無さを感じながら、会話も無く、都内の道をただ家路に向かうしか無かったのだろう。子を持つ親になって、身に沁みてわかる。母が当たり前のようにしてくれていたことに不平不満を吐いて放埒な行動をとっていた自分が情けなく、この時期、青年から大人への第一歩として改めて学ぶことができた。二回目の気づき“感謝”である。

入社した Apparel 企業では、新入十数人が各セクションに配属され、仕上屋さん回り、タグ（値札票）付け、展示会準備、販売応援、先輩営業マンのサブなどの流れで見て聞いて盗んで真似た。仕事が終わると当時の最先端のオシャレをして「眠らない街、新宿」へ繰り出すのだった。ディスコの全盛期である。

数週間が経った頃、企画会議出席するように言われ、議題は、今年のアロハシャツに付属する「プライスカード」及び「ネームラベル」のデザインを募集することとで、考案し提出するように命じられ、その時は、“別に自分が出さなくても”という気持ちと“チャンスかも知れない”という熱い思いが交錯し、週末帰郷する予定を

返上し、東京というビッグな街を一人ウォッチングしてブラついた記憶がある。結局、何も掴めず、帰り際に立ち寄った書店に常夏の国、ハワイの本があった。アロハシャツといえば、ハワイ！この中に何かが隠されていると数冊購入し、寮に帰り、食事もせずに読み耽った。まだ見ぬハワイを勝手にイメージしながらスケッチし、数日後に各一点ずつ提出、結局、若干の手直しはされたが奇跡的に二点とも採用となり、三万五千枚を売り上げたアロハシャツの一役を担うことができた。これが契機となり環境が変化しはじめる。すれ違う社員が笑顔で“声がけ”をしてくれるようになった。“おめでと！”“やったね！”嬉しかった。提出してみてもよかった。

もしあの日、予定通りに旧友が待つ田舎に帰郷していたら、また、違った思い出があったにしても、この思いは永遠に経験できなかつたことだろう、行動した人だけが言える“してよかった”を言えずに何の変哲もない一日に自らを変えてしまうのだ。思ったことに対して躊躇せず、素直に行動に移し、自分らしく自然体で表現できたからこそ、採用に至ったのだと思う。この時、指示待ち人間になったら枯れてしまう、どんな環境でも目的指向人間でいなければということ、そして、“優先順位”

の見極め、また、いい仕事ができただけ後は、決まって適度に遊んでいたことにも気づいた。現在もそうだが上手に遊べないと発展性がないように思う。三回目の気づき「声がけ」「素直な行動」「優先順位」「遊び」である。

今にして思うが上京してわずか数カ月の素人の作品に目を留めてくれた当時のチーフの懐の深さに敬服して止まない。

初めての親孝行

合間を見て田舎に帰郷すると、数人の友人が自慢の愛車で迎えに来てくれた。家には帰らず、そのまま海や山へツーリングに出かける。都内で車を所有するのは無理だったが、帰郷するたび車が欲しくなり両親に掛け合い、半額負担で購入を承諾。何もない週末には一人帰郷して愛車の手入れをするのが嬉しかった。

ある時、電車の時間も押し詰まり、慌てて玄関に向かうと両親が「公務員の試験があるから、受けるだけ受けてみないか」「はあ〜？ どうせ受からないからいいよ」と足早に家を後にしたが中途半端な言い方をしたせい、自分の知らないところでその話が着々と進行しているとは想像もしてなかった。母からの電話で再三断るが「受けるだけだからいいでしょう？」と両親

の訴えに「これも親孝行かな」と試験日と面接日の二日間帰郷する。足掛け二年の中で唯一、有給休暇はその試験のために使用した。今では考えにくい。

ひと月ぐらいたった時のこと、帰郷して東京に戻ろうとした時、母が「通知が来てるから、見といて」なんの気負いも無く開封してみると「合格 四月一日採用」の文字…その驚愕の事実は何もいえないまま、呆然と電車に乗った。自分が招いた失態はすでに年の瀬も押し詰まった十一月の寒い日だった。

年が明けると、そんなことも忘れ、新事業部の立ち上げや得意先の担当替えて会社は売り上げの絶頂期を迎える。殆どの新人も担当が決まった。一方で四月が刻々と迫っている。いくら想像しても自分が官公庁でネクタイをして椅子に座り、仕事をしているというイメージがどうしてもできなかった。親からの電話が目を追うごとに増し、その度、やるせない思いでいた。

最終的に絶大な信頼を置いていたチーフに相談をすることになる。「本人としては、どうしたいんだ？」の問いに「この会社で何処まで通用するか試してみたい」と答えた。するとチーフは「両親の空いている日を聞いておいてくれ、一緒に帰って、話をしてみる」嬉しい反面、ここまでしても

らっていいのか？ という思いもあったが数日後同行し実家に向かうことになった。

チーフは、正座をし淡々と説得し始めた。「可能性がある人間だから、ぜひ残ってもらいたい。毎年十数人の新人が入社するが残って欲しい人材は、決まって一人か二人なんです。息子さんがそのうちの一人です」情熱的に説得してくれているチーフのその訴えを冷静にうつつむきながら聞いている両親の前に、複雑な心境で聞いていた。

そんな揺るがぬ気持ちで動かしただけは、無口な父が初めて見せた涙だった。何かの用事で帰郷して東京に戻ろうとした際、いつもなら母親が見送ってくれるはずがその日は父が玄関先まで出て、目線を下げ、「帰って来ないのか…」と呟いた。自分で試験を受けておいて、全て自分が原因なのに両親にここまで残酷な思いをさせて、なんて親不孝な人間なんだと自己嫌悪に陥り、東京に戻った。

夏展が終わり、夏物出荷の最盛期が落ち着いた四月二五日依願退職、入庁したのは、僅かその六日後のことである。

ローターアクトクラブの仲間

最初の配属部署は市民課。営業だったせい、座って仕事をする「こと



年度最終日の打上げ旅行
不意な呼びかけにも拘わらず集まってくれた水戸、笠間、下館、佐野、足利ローターアクトクラブの素敵な面々

が常識に無かったので仕事から仕事への合間も座るのに時間が必要だった。いや、僅かな抵抗だったのかもしれない。

アパレルにいる時、憧れの格好といえは「ダブルボンボタンの紺のスーツ」だ。「二〇歳になったら、似合う男になれ」と伝説のように言われてきた。戸内を見渡してみると殆どの職員が「紺ブレ」である。さすが下館（現在・筑西市）はオシャレな街だと感心していたが、ある程度勤務すると支給

される「シングルボタン紺のお揃いブレザー」だったことが後に判る。

数ヶ月経った時、隣の課の先輩に誘いを受け、ローターアクトクラブに入会。当時は茨城栃木十五クラブ、三〇〇名を超える一八歳から三〇歳までの異業種の男女で構成、地域にリーダーを養成しようという目的の下、ロータークラブの提唱を受けて創設されたクラブ、世界規模で存在し、台湾やハワイ、イタリアのメンバーとも交流した。

入会して八年後、二八才の時、地区代表に選任され、一年間で一八〇日を超える行動記録、定款の改正、地区役員の増員など素晴らしい役員に恵まれ、新しいことへの礎を築くことができた。

なかでも筑波研究学園都市を舞台に二日間に渡って開催した年度内最大イベント「第十八回地区年次大会」は人生最大の経験ともいえる。総登録者数四五〇名を超えるビッグイベントの準備に半年もの歳月を使い、二二人のメンバーでこなした。

なぜ、開催地が地元の下館市ではなく、つくば市だったのか？「茨城の下館」をPRすることも重要だったが、茨城には、「世界のつくば」「サイエンスつくば」があるということ在全国レベルでPRしたかったということの意

が伝わり、最終的には地元ロータリアンも多数参加して頂き、この身に余る賞賛も頂いた。

強く思い続け、その思いに対して価値観の共有できる仲間と共に適切なアクションを起こしてこれたからこそ現実のものとなって、多くの参加者から共感の言葉も得ることができたのだと思っている。二二人が結束し、一枚岩と化したことが成功裡に終えた最大の要因である。今でも最後の場面を思い出すと感極まる。「思いは実現する」四回目の気づきである。

親友の突然死

その親友はクラブ以外の友人で学生時代から野球に青春をかけ、自分は応援団という立場で声援を送った関係にあった。卒業を機に一層付き合いが親交し、同じ車を購入するほどの仲になり、二四歳を迎えた頃、結婚式の司会を依頼され、手作りの招待状や席順表など一緒に取り組んでいた。

とある金曜日、珍しく彼から誘われ、明日からの週末、一泊二日で会社の慰安旅行で大好きなゴルフをしてもらうという。「なんか調子が悪い」とは言っていたが「優勝してくるから」と笑顔で別れた。これが自分に対する最後の言葉になってしまった。旅行から帰宅し、調子が悪いからと翌朝病院に行っ



ロータリークラブにおける最後のリーダーシップ研修会での表彰式の様子

て入院、その翌日変わり果てた姿で再会する。

仕事も途中で一目散に駆けつける
と、ご両親が悲痛な様相で「お世話
になった方々に連絡して欲しい」「弔
辞は、司会を依頼していた相澤さん
にお願いしたい」その他事細かな取り決
めの中で現実引き戻されていく自分
が嫌だった。結婚式の司会から葬儀の
弔辞という、信じがたい事実と思う存
分泣いていたかった。友人や親の死と
いうのは全く人事であり、認めたくな
い思いで弔辞も書いては破棄、書いて
は破棄で当日の朝まで書けなかった。
こんな辛いことがあったら夜は明けな
いと思っただし、お腹も空かないと思っ
た。しかし、現実には朝も来るし、お

腹も減る、やるべきことはやるしかな
いのだ、この非情な世の中の常識を認
めざるを得なかった。

二〇代半ばでの大親友の死と直面し
て大きく再認識させられたことは、人
間いつかは必ず死を迎える、それはあ
る日突然来る、毎日時間を削って生
きていて時間は確実に限りがある、一
日二四時間という平等な時間をどう使
うかということ。これらによって、意
外な誘いは断われない、自分にできる
ことは何かを常に考えたい、今思った
ことはとりあえず何らかの形で行動に
移しておこう。という五回目の気づき
となって今尚、自分のライフプランの
根底に存在する。

今でも命日には、愛飲の缶コーヒー
と煙草を持って会いに行く。
後でわかったことだが、彼は約束ど
おり、優勝して帰ってきていた。

最後に

公務員になって早、二十数年、世
の中は急速に変化し、未常識だったこ
とが常識に変わっていく。国鉄に始
まり、電電公社、最近では郵便局等、
公から民へという流れが社会的常識に
なってきた。その理由のひとつに
は、民間企業の活力と発想、そして
マネージメントが必要なのだろう。昨
今、地域住民が公務員という存在に求

めていることは、知識や技能の大きな
変化である。地域で生きる一員として
住民と共に地域の問題を語り合い、考
え、一緒に「自治」をしていくことが
望まれている。民間企業は利潤追求型、
公的機関はサービス重視型で、目的に
大きな違いはあるものの、公務の中で
も地方公営企業といわれるれっきとし
た事業も担っている。主なものに水道
事業、病院事業、スキー事業、地下
鉄事業などがあるが、特に病院事業に
ついては経営主体をどうするか？ 公
営か民営か、などここ数年、世論から
注目を浴び、自治体病院が話題になっ
ている。なぜ、公立がそうになってしまっ
たのか？ 全国の自治体病院関係者
は懸命に紐解きをして早期改善をして
いる真っ只中でもある。

公務員に限らず、何かの元で働いて
いる間は組織の中の一部品、一歯車で
あって、組織全体をある程度把握して
さえいけば、一部品、一歯車の重要性
や存在が認識でき、自分の今の仕事に
自信を持ち、その人の存在を認めるこ
とも繋がる。組織というのは、ジグ
ソーパズルにどこか似ていて、自分の
ワンピースの場所の所在がはつきりし
たとき、やる気も出てくる。その中で
いかに「知恵」を使うかということが
重要だと思っただし、「知識」という
のはすでに世の中に存在しているもの



都市計画部在籍中にデザインした公園

で専門学校や大学に行けば学ぶことができる。「知識」を持っている人はごまんといるだろう。しかし重要なのは、その「知識」を「知恵」に変える能力、障害となつているものに怯むことなく、自分という存在をどう表現していくかということなのだ。学歴のような静的能力だけではなく、実行力や行動力といった動的能力も必要であり、これからは「入れる」より、「出す」「頭の使い方が要求されてくるだろう。」

将来や未来に対する仕事というのは、改革をして方法を改めるといふことだから、旧来のやり方に安住しがちな現状維持の職員は、当然、嫌がることだろう。「前例がない」「近隣でやってない」などと言いつつ盾に煙に巻き、保留にされ、前向きな発想もいつのまにか忘れ去られてしまう。

大切なのはその時だ、どう訴えるか！生簀の中の養殖魚や鳥かごの中の飛べない鳥にはなつてはいけない。自分という存在が何処かへ行つてしまふ。前例がないから、やる価値があるのではないか、近隣より先にやるから賞賛を浴び、周りが追いかけてきてくれるのではないか。

そういった活気ある街づくり行政と一緒にできる人的ネットワークを構築しながら、新しい価値観を見いだすこともこれからは重要な責務のひとつであると思う。

民間を経験して公務員になっている方、また公務員から民間人となっている方、その時々々の思いによって、様々な経験を活かして見えない柵と戦っている方も多いのではないかとも思う。だからといって、輩に合わせる自分にはなりたくない。人の目にどう映るかなんて、どうでもいいことだったはず。何か事あるたびに三択を自分に問いかけている。「逃げるか」「我慢するか」「戦

うか」その中で自分が納得できるかどうか。胸中の奥にある本来の自分を決して忘れないでいたい。

民間人から公務員という、その貴重な経験をフルに活かして、『公から民へ』の時代を乗り越え、いつかは『民から公へ』と言われるように新しい公務員像時代の道筋を、その経験をした一人として、経験と出会いの中から学んだ「五回の気づき」を基本に自分の価値を信じながら、心だけは年をとらないことを行動や発想の中で証明していければと考えている。過去のさまざまな決断に対し、しがみついて悔やんでいる暇があつたら、きたるべきことで頭を一杯にしたい。そして今、この場所に存在している自分が最良の場所と信じて周りに生かされながら自分活用していく以外に道はないのである。

プライベートの友人には事業家が多く存在する。「一般人」であるためには異業種の友人との付き合いは自分を奮い立たせてくれる刺激的な場所でもある。ジャンルは違うが自分が自分であるために建設的な行動を起こしてきた人達とはどこか通じ合う。

『公務員はくれないよな』と会話の中でよく言われるが、いつまで経つても、最高の褒め言葉と受け取っていたい。

その角度から見えるものは、自分にとって、「貴重なもの」である。